日本整形外科学会 80 年史

2006

社団法人 日本整形外科学会

(4) 九州帝国大学医学部整形外科講座の創立

1903(明治36)年3月25日，京都帝国大学福岡医科大学の名称で創立したが，創立当初から整形外科学講座の新設を積極的に進めていた．講座担当の候補者として東大の第二外科佐藤三吉門下生で，1902(明治35)年に東大を卒業した住田正雄(1878-1946，兵庫県出身)を1906(明治39)年8月に外科学助教授として招聘した．同年9月に外科第二講座の担当を命ぜられたが，1909(明治42)年5月24日，勅令第142号をもって整形外科学講座が新設された．その間住田は1908(明治41)年9月から1912(明治45)年6月まで，文部省留学生としてドイツで整形外科を研修することになった．

ドイツでは最初にゲッチンゲン大学病理学のEduard Kaufmann(1860-1931)のもとで骨病理学を研究し，ついでウィーンでは，A. Lorenz(1854-1946)を訪ねた後，主としてライプツィヒ大学外科のErwin Payr(1871-1946)教授のもとで関節授動術の基礎実験を行った．1912(明治45)年7月17日付で九州帝国大学医科大学教授(整形外科講座担当)に任命され，1913(大正2)年1月15日から整形外科の診療が始まった．

かくして日本の近代整形外科という鼎の3本目の脚がそろうこととなった．

1914(大正3)年の第13回日本外科学会総会で宿題報告「関節結核」を担当，1916(大正5)年の第15回日本外科学総会では東大で関節授動術の供覧など目覚ましい整形外科の業績をあげていった．1924(大正13)年には『開講10周年記念論文集』を出版した．日本最初のまとまった整形外科学教室業績集である(図41)．

しかし1925(大正14)年，いわゆる九大事件により同年8月に免官されて野に下り，大阪で住田病院を開業した．

住田の後任には田代義徳の門下生神中正一(1890-1953，神戸出身)がロンドン留学中の1926(大正15)年5月5日に第二代教授に任命され，揺らごうとしていた日本の整形外科学という鼎の3本の脚はようやく安定をみることになった．

(5) 各地の医育機関における整形外科学講座の新設

東京，京都，九州の3帝国大学における整形外科学講座の新設に続いて4番目の講座が1917(大正6)年10月25日，新潟医学専門学校に新設され，田代義徳の門下生本島一郎(1883-1952)が初代教授に任命された．

1921(大正10)年には慶應義塾大学医学部に整形接骨科講座が設けられ，同じく田代門下の桂秀三(1889-1942)が講師として就任した．しかし1922(大正11)年に東大近藤外科出身の前田友助(1887-1975)に代わった．同年田代門下の片山国幸(1884-1962)は東京慈恵会医科大学整形外科学教授となった．1924(大正13)年9月にはやはり田代門下の金子魁一(1883-1948)が東京女子医学専門学校の整形外科学の教授として赴任した．

田代義徳は定年退官する1924(大正13)年9月までにようやく4つの医育機関に整形外科学の指導者を送りこむことができた．退官後間もない1926(大正15)年には九大に門下生の神中正一(1890-1953)を教授として送り込んだ．1927(昭和2)年には名倉重雄(1894-1985)を愛知医科大学(現・名古屋大)の整形外科学講座の主任教授に就任させた．

京大と慶大を除いて医育機関における整形外科は田代義徳の門下生によって占められた．

17. 整形外科学的研究成果とその発表

東大，京大は1906(明治39)年，九大は1909(明治42)年に整形外科学講座が独立したが，その研究業

Festschrift
Herrn Professor Dr. Masao Sumita
zur Feier
seiner zehnjährigen Lehrtätigkeit im orthopädisch-chirurgischen Institut, Universität zu Kyushu.

九州帝國大學醫學部
整形外科教室
開講十周年記念論文集
全

図41　九州帝国大学医学部整形外科教室(住田正雄主任)『開講10周年記念論文集』1924年刊．日本で最初の整形外科学教室業績集である．

日本整形外科学会歴代役員

◇会　長（第１回）　田代　義徳

◇大正15，昭和元年度

会　長（第２回）	田代　義徳	
常務幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	星野健太郎	（会計主任）
幹　事	片山　國幸	（庶務及編集）
	國分　壽郎	（庶務及編集）
	鈴木　諒爾	（庶務及編集）

◇昭和２年度

会　長（第３回）	高木　憲次	（田代義徳会長代理）
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	星野健太郎	（会計主任）
幹　事	金子　魁一	
	國分　壽郎	
	鈴木　諒爾	

◇昭和３年度

会　長（第４回）	本島　一郎	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	星野健太郎	（会計主任）
幹　事	金子　魁一	
	國分　壽郎	
	名倉　英二	

◇昭和４年度

会　長（第５回）	高木　憲次	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	星野健太郎	（会計主任）
幹　事	伊藤　　弘	
	金子　魁一	
	神中　正一	

◇昭和５年度

会　長（第６回）	伊藤　　弘	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	星野健太郎	（会計主任）
幹　事	金子　魁一	
	神中　正一	
	前田和三郎	

◇昭和６年度

会　長（第７回）	神中　正一	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	伊藤　　弘	
	片山　國幸	
	本島　一郎	

◇昭和７年度

会　長（第８回）	片山　國幸	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	伊藤　　弘	
	名倉　重雄	
	前田和三郎	

◇昭和８年度

会　長（第９回）	近藤　次繁	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	片山　國幸	
	前田和三郎	
	松浦和一郎	

◇昭和９年度

会　長（第10回）	前田和三郎	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	片山　國幸	
	前田和三郎	
	松浦和一郎	

◇昭和10年度

会　長（第11回）	名倉　重雄	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	伊藤　　弘	
	神中　正一	
	本島　一郎	

◇昭和11年度

会　長（第12回）	東　　陽一	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	不明	

◇昭和12年度

会　長（第13回）	伊藤　　弘	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	不明	

◇昭和13年度

会　長（第14回）	中村　両造	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	不明	

◇昭和14年度

会　長（第15回）	齋藤　一男	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	片山　國幸	
	神中　正一	
	前田和三郎	

◇昭和15年度

会　長（第16回）	本島　一郎	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）
幹　事	近藤　鋭矢	
	神中　正一	
	名倉　重雄	

◇昭和16年度

会　長（第17回）	高木　憲次	
常任幹事	高木　憲次	（編輯主任）
	金子　魁一	（会計主任）

第1回日本整形外科学会総会

会長　田代義徳(東京帝大)
1926(大正15)年4月3日
東京・東京帝国大学医学部内科新講堂

第2回日本整形外科学会総会

会長　田代義徳(東京帝大)
1927(昭和2)年4月2日
京都・京都帝国大学法経第二大講堂

宿題講演

1. 先天性股関節脱臼　高木憲次
2. 先天性股関節脱臼　林　喜作

第3回日本整形外科学会総会

会長　高木憲次(東京帝大，田代義徳会長代理)
1928(昭和3)年4月2日
東京・東京帝国大学医学部整形外科教室

宿題講演

Apophyseopathie　本島一郎

第4回日本整形外科学会総会

会長　本島一郎(新潟医大)
1929(昭和4)年4月5日
新潟・新潟医大附属病院第一講堂

宿題講演

脊椎変形　神中正一

第5回日本整形外科学会総会

会長　高木憲次(東京帝大)
1930(昭和5)年4月3，4日
大阪・大阪市堂島小学校，大阪医大東講堂

宿題講演

義肢と切断術　片山國幸

第6回日本整形外科学会総会

会長　伊藤　弘(京都帝大)
1931(昭和6)年4月2，3日
東京・東京帝国大学法経講堂7号室

宿題講演

骨折ニヨル畸形　名倉重雄

第7回日本整形外科学会総会

会長　神中正一(九州帝大)
1932(昭和7)年4月2，3日
東京・東京帝国大学工学部三階第一号講堂

宿題講演

「ミエログラフィー」ト脊髄外科　東　陽一

第8回日本整形外科学会総会

会長　片山國幸(慈恵医大)
1933(昭和8)年3月31日，4月1日
京都・京都帝国大学工学部共同第二講義室

宿題講演

1. 結核性脊髄炎ノ観血的療法　土屋準一
2. 結核性脊椎炎患者血液ノ理化学的性状特ニ日光浴ノ影響ニ就テ　城　良亮
3. 結核性脊椎炎ノ診断　前田和三郎

第9回日本整形外科学会総会

会長　近藤次繁(東京帝大)
1934(昭和9)年4月2，3日
東京・東京帝国大学法文経一号館

宿題講演

「スポーツ」ト整形外科　斉藤一男

第10回日本整形外科学会総会

会長　前田和三郎(慶大)
1935(昭和10)年4月2，3日
東京・東京帝国大学工学部新館三階講堂

宿題講演

1. Die Operative Chirurgie des Hüftgelenkes　S. Jinnaka
2. 脊髄外科　前田和三郎他

第11回日本整形外科学会総会

会長　名倉重雄(名古屋医大)
1936(昭和11)年3月31日，4月1日
名古屋・名古屋医大西臨床講義室

宿題講演

クロナキシー法ノ外科的応用　小沢凱夫他

第12回日本整形外科学会総会

会長　東　陽一(熊本医大)
1937(昭和12)年5月15，16日
熊本・熊本医科大学

宿題講演

災害外科　内藤三郎他

第13回日本整形外科学会総会

会長　伊藤　弘(京都帝大)
1938(昭和13)年4月2，3日
京都・京都帝国大学工学部第一共同講義室

宿題講演

関節鏡　高木憲次

第14回日本整形外科学会総会

会長　中村両造(京城帝大)
1939(昭和14)年5月13, 14日
京城・京城帝国大学医学部大講堂

第15回日本整形外科学会総会

会長　斉藤一男(日医大)
1940(昭和15)年4月5, 6日
東京・日本医科大学講堂

宿題講演
淋疾性関節炎　島田信勝他
特別講演
臨時東京第三陸軍病院ニ於テ経験セル戦傷ト整形外科　大江捷次郎他

第16回日本整形外科学会総会

会長　本島一郎(新潟医大)
1941(昭和16)年4月6, 7日
新潟・新潟医科大学講堂

宿題講演
骨変形成因の研究　名倉重雄他
特別講演
本事変(支那事変)に於ける戦傷切断患者の特殊治療概況　映画「興亜の鉄」(東一院編輯)及其他映画並に治療用訓練義肢及び完装義肢試作品供覧　保利　清

第17回日本整形外科学会総会

会長　高木憲次(東京帝大)
1942(昭和17)年3月27-29日
東京・東京帝国大学医学部南講堂

宿題講演
先天性股関節脱臼の本態　名倉重雄
特別講演
戦傷骨折　滝川一美他

第18回日本整形外科学会総会

会長　前田和三郎(慶大)
1943(昭和18)年3月31日-4月2日
東京・慶應義塾大学医学部北里講堂

宿題講演
1. 先天性筋性斜頸の成因　野崎寛三他
2. 姿勢に就て　斉藤一男

特別講演
戦傷肢体不自由者職業補導の医学的経験　神中正一

第19回日本整形外科学会総会

会長　近藤鋭矢(京都帝大)
1946(昭和21)年10月12日
京都・京都帝国大学医学部外科整形外科講堂

宿題講演
1. 所謂脊椎過敏症　水町四郎
2. 骨移植　光安万夫
3. 所謂五十肩　三木威勇治

第20回日本整形外科学会総会

会長　名倉重雄(名大)
1947(昭和22)年4月1, 2日
大阪・大阪キリスト教青年会館

宿題講演
産業医学方面より見たる足の問題　水野祥太郎

第21回日本整形外科学会総会

会長　片山良亮(慈恵医大)
1948(昭和23)年4月26-28日
東京・東京慈恵会医科大学講堂

宿題講演
1. 関節成形術　神中正一他
2. 災害と職能　水町四郎他

特別講演
1. 児童福祉法と整形外科　高木憲次
2. 関節運動と肢位の表示法　高木憲次

第22回日本整形外科学会総会

会長　神中正一(九大)
1949(昭和24)年4月9-11日
福岡・九州大学医学部中央講堂

宿題講演
1. 所謂調圧神経と慢性多発関節ロイマチス　清水源一郎
2. 骨関節結核の混合感染の治癒に関する意義と化学療法　片山良亮他
3. 脊髄損傷の後遺症と後療法　岩原寅猪

第23回日本整形外科学会総会

会長　岩原寅猪(慶大)
1950(昭和25)年4月1-3日
東京・慶應義塾大学医学部北里講堂

宿題講演
1. 佝僂症と骨骼変形　天児民和
2. 脳疾患と整形外科　斉藤一男他

第24回日本整形外科学会総会

会長　三木威勇治(東大)
1951(昭和26)年4月2-4日
東京・国立博物館講堂

協同研究
1. 骨折
2. 骨関節結核

新潟大学大学院医歯学総合研究科機能再建医学講座整形外科学分野

〒951-8510　新潟市旭町通1
Tel. 025-227-2272　Fax 025-227-0782
URL　http://www.med.niigata-u.ac.jp/ort/orthop_home.html

◘大学開校時期

1949(昭和24)年5月31日，国立学校設置法の公布により6学部からなる新潟大学が設置された．

一方，医学部は1873(明治6)年県令で新潟町の町会所内に医学教場が設けられ，1876(明治9)年4月に県立新潟病院新潟医学所となり，1910(明治43)年3月，文部省直轄諸学校官制改正により，新潟医学専門学校が創立された．その後，1922(大正11)年3月，官立医科大学官制の施行により新潟医科大学が開設された．

◘名称の変遷

開設当初：新潟医学専門学校整形外科学教室
1922(大正11)年：新潟医科大学整形外科学教室
1949(昭和24)年：新潟大学医学部整形外科学教室
2001(平成13)年4月：新潟大学大学院医歯学総合研究科機能再建医学講座整形外科学分野

◘教室開設年月日

1917(大正6)年10月25日

本島一郎初代教授は大正6年10月6日に任命され，10月25日に着任した．

◘開設以来の同門者数

534名

◘現在の同門者数

428名

◘歴代主任教授(生年−没年)とその在任期間

本島一郎 教授（1883−1952）
1917年10月25日−1944年9月9日

天児民和 教授（1905−1995）
1945年6月1日−1950年10月15日

河野左宙 教授（1910−1997）
1951年3月1日−1970年3月31日

田島達也 教授（1923−2003）
1970年10月15日−1989年3月31日

高橋栄明 教授（1933−）
1989年8月1日−1999年3月31日

遠藤直人 教授（1954-）
1999年11月1日-

◘主たる臨床活動，研究活動の変遷

新潟医学専門学校で第一外科学教授として外科学と整形外科学の講義を行っていた池田廉一郎(1870-1930)は，留学で得た欧州の近代外科と日本の外科の現状を比較し，早くから整形外科と脳神経外科の独立に深い関心を持っていた．1917(大正6)年，池原康造(1860-1916)の後任として新潟医学専門学校の二代目の校長に就任した池田は，直ちに整形外科学の独立講座としての開設に着手した．同年10月25日，東京帝国大学整形外科田代義徳教授のもとで医局長として活躍していた本島一郎が34歳の若さで整形外科の初代教授として着任し，新潟大学整形外科は，東京帝国大学，京都帝国大学，九州帝国大学についで日本で4番目の整形外科独立講座として産声をあげた．

整形外科学の講義と外来診療は11月1日から開始されたが，まず整形外科のことを地方の人々に認識してもらうことが大切であると考え，新潟新聞に「整形外科とは何ぞや」という一文を発表したという．11月18日には第53回北越医学会例会の席上，「整形外科ノ領域ニ就キテ」と題して最初の講演を行っている．着任後の最初の学術論文は，「移植骨ノ運命ニ就テ」(北越医学会雑誌33巻第3号大正7年6月)である．

本島一郎教授は1921(大正10)年，1933(昭和8)年の2回にわたり欧州留学し，オーストリア・ウィーンのSpitzyなどの教室を見学し，また，母校の田代教授らとともに日本整形外科学会を創設した．整形外科学会では宿題報告の「アポフィゼオパチー(骨端症)」を担当し，第4回(1929〈昭和4〉年4月)ならびに第16回(1941〈昭和16〉年4月)の日本整形外科学会会長を務め，創世記のわが国の整形外科の発展に大きく貢献した．新潟医科大学附属病院長，新潟医科大学長，学術研究会議会員，SICOT正会員を務め，教授退任後は第五高等学校(熊本)の校長に就任した．

本島教授の第1回の欧州留学の際には，中田瑞穂外科学教室助教授(当時，後に外科学教授を経て，1953〈昭和28〉年8月1日，脳神経外科学講座を独立させ自ら主任教授を務める，日本の脳神経外科の先駆者)が附属病院整形外科医長として整形外科の診療と講義を担当した．

1923(大正12)年9月の関東大震災では，新潟医大からも医療救護班が編成され，中田助教授以下が東京で罹災者の診療に当たった．

第二代の天児民和教授は，1930(昭和5)年に九州帝国大学医学部を卒業し，神中正一教授の主宰する整形外科教室に入り，ドイツ留学を経て1945(昭和20)年6月，整形外科主任教授として新潟医科大学に赴任した．折しも終戦直前から戦後の混乱期にあり，医局員も召集され，食料，医薬品，X線フィルムなど，すべてが極端に不足していた時代に短期間ではあったが，「新潟地方の整形外科の捨て石になろう」と臨床および研究活動に粉骨砕身した．1949(昭和24)年8月に東頚城郡松代村で行ったくる病の実地調査を第23回日本整形外科学会総会で宿題報告し，高い評価をうけた．「我国に今日多数佝僂病を発生していることは文明国として決して名誉ではないのである．今日重要なる問題即，①生活環境の改善，②栄養の合理化，③予防医学の普及，④ビタミンD剤の高単位化等多くの問題を残しているが，殊にビタミンD剤の高単位化は我国製薬界に切望したいことである．また骨生理学の研究も更に進展せしめねば骨骼変形の予防に治療について解決できない多くの問題を残している」と述べ，この報告が国産ビタミンD剤開発の引き金となった．また，その後における天児教授の骨関節の生理学力学および病態生理の研究の発火点となったものであった．この松代村での検診は，変形性膝関節症の検診に内容を変え現在も行われている．1949年7月に新潟大学医学部附属病院長を併任した後，1950(昭和25)年10月15日，母校の整形外科教室神中正一教授退官により，後任に選出され，九州大学整形外科教室を主宰した．

第三代の河野左宙教授は，1934(昭和9)年に九州帝国大学医学部を卒業し，神中整形外科教室から初代米子医科大学教授を経て，1951(昭和26)年3月に着任した．教室の整備拡充に務めるとともに整形外科同窓会を結成し，教室の縦と横の糸をはじめて1本に連結した．整形外科の社会的要請

度の高まりと河野教授の人望に惹かれて多くの門下生が集まった．1954(昭和29)年に飯野三郎教授と東北整形災害外科学会を結成した．JK膜(神中・河野膜)を用いての関節形成術や，関節結核に対する関節固定術および河野法の確立，先天股脱，小児麻酔，電気生理学的研究法の導入(筋電計)，骨髄炎など多くの研究分野で成果をあげる一方，第35回日本整形外科学会会長，第1回西太平洋整形外科学会会長などを務めた．また，新潟大学附属病院長，肢体不自由児施設はまぐみ学園初代園長など学内外の要職を歴任し，とくに1968(昭和43)年から1969(昭和44)年にかけての大学紛争の時期には附属病院長代行として，その収拾に尽力した．1970(昭和45)年，「本来臨床家として雑事に煩わされず患者を診察しこれを治療することを楽しみ」とし，定年まで数年を残して退官し，聖隷浜松病院に移った．

第四代の田島達也教授は，1947(昭和22)年に新潟医科大学を卒業後，天児民和教授の主宰する整形外科に入り，1952(昭和27)年，日本で最初のロックフェラー財団のフェローとして米国留学を経て帰学，講師，助教授を歴任後，1970(昭和45)年10月に教授に就任した．田島教授は米国から導入した手の外科を教室の主題として発展させ，日本の手の外科における先駆者として，現在では一般的な手術材料，手術器具，縫合糸，縫合鋼線，受針器，止血鉗子，ピンセットの改良試作等にも着手し，一方で手の解剖学を極めながら手の外科を開拓していった．屈筋腱や末梢神経に関する研究で世界的な業績をあげ，また，マイクロサージャリーでは，1973(昭和48)年10月に切断指の再接着の1例目が成功し，その後複合組織移植に発展した．さらに河野教授時代に始まった専門研究班体制を充実させ，11の診療研究班を編成し，手の外科のみならず広い分野で多くの研究成果をあげた．また「国内外の新知見を批判しながら取り入れることは大学および研究機関の使命である」として積極的に海外留学を推奨し，欧米諸国へ多くの医局員を送り出した．また田島教授は認定医制度委員会において整形外科の認定医の発足に多大の貢献をした．学会では第60回日本整形外科学会会長をはじめ，日本手の外科学会，日本形成外科学会，国際手の外科学会の会長などを歴任した．また，医学部附属病院長(1980-1984)としても活躍した．夏季に行われている新潟手の外科セミナーは多数の参加者がある．1989(平成元)年退官後は新潟手の外科研究所に移り活躍した．

第五代の高橋栄明教授は，1958(昭和33)年に新潟大学医学部を卒業後，河野左宙教授の主宰する整形外科に入り，米国留学を経て帰学，講師，助教授を歴任後，1989年8月に教授に就任した．高橋教授は米国留学中にFrost先生のもとで学んだ骨代謝および骨形態計測の研究を教室の主題として精力的に研究を行った．1965(昭和40)年に高橋教授により始められた骨代謝研究は形態計測から遺伝子レベルまで幅広く発展し，一方で新潟県全域に及ぶ大腿骨頚部骨折疫学調査も行い，またQOLの研究も進めた．新潟大学医学部国際交流委員会や日露医学医療交流財団の役員を歴任し，これまで欧米が中心であった国際交流をロシアやアジア諸国にも目を向け，またこれらの国々からの留学生を積極的に受け入れた．現在も毎年アジアからの留学生を受け入れている．学会では，1997(平成9)年に第12回日本整形外科基礎学術集会を開催し，日本骨代謝学会，日本臨床バイオメカニクス学会，国際骨形態計測学会などの会長を歴任した．退任後は新設された新潟医療福祉大学学長として，コメディカルの育成にも活躍している．

第六代の遠藤直人教授は，1980(昭和55)年に新潟大学医学部を卒業後，田島達也教授の主宰する整形外科教室に入局し，大阪大学大学院への国内留学，米国留学を経て帰学，助手，講師を歴任後，1999(平成11)年11月に教授に就任した．遠藤教授は留学中に研究した骨，軟骨代謝の分子細胞生物学的研究を生かし生体の修復，再生を教室の大きなテーマと位置づけ，精力的に研究を行っている．また，高齢化社会に目を向け，骨粗鬆症の病態，治療についても研究，臨床面で業績をあげている．2001(平成13)年，当大学は大学院大学となり大きな変革期を迎えているが，臨床，教育，研究と今後更なる発展が期待されている．

◎主な主催学会

本島一郎教授

・第4回日本整形外科学会総会
　1929(昭和4)年4月

・第16回日本整形外科学会総会
　1941(昭和16)年4月

河野左宙教授

・第4回日本手の外科学会
1960(昭和35)年9月

・第35回日本整形外科学会総会
1962(昭和37)年5月

・第1回西太平洋整形外科学会
1962(昭和37)年12月

・第10回日本脳波・筋電図学会
1968(昭和43)年10月

田島達也教授

・第15回日本手の外科学会
1972(昭和47)年5月

・第16回日本形成外科学会
1973(昭和48)年9月

・第17回骨・軟部腫瘍研究会
1984(昭和59)年7月

・第3回国際手の外科学会
1986(昭和61)年11月

・第60回日本整形外科学会学術集会
1987(昭和62)年4月

高橋栄明教授

・第5回国際骨形態計測学会
1988(昭和63)年7月

・第10回日本骨代謝学会
1992(平成4)年7月

・第21回日本臨床バイオメカニクス学会
1994(平成6)年10月

・第12回日本整形外科基礎学術集会
1997(平成9)年10月

□業績集

開講60周年記念業績集・教室史
1977(昭和52)年10月発行

田島達也教授退官記念業績集・教室の歩み
1977-89年
1989(平成元)年4月発行

高橋栄明教授退官記念業績集・教室の歩み
1989-99年
2000(平成12)年2月発行

□同門会誌

新潟大学医学部整形外科学教室同窓会誌
1952(昭和27)年から毎年1回発行

(荒井勝光)